

インドって国は、【聖地】という言葉がとてよく似合う。シーク教の聖地アムリトサル、チベット仏教の聖地ドラムサラを既に制覇したので、残るはマニカランだけである。

「あれっガンダーラは？」という声が聞こえてきそうだが、あれは実はパキスタンである。

マニカランは、そうインドの温泉の聖地なのである。ヒンドゥーの聖地で、ガンジス河に面するバラナシって場所もあるが、上流の方がいいに決まっている。何といっても水の温度はこちらの方が高い。

よってマニカランは、インドの聖地中の聖地と言える。しかしヒマラヤの山奥にあるので、一般の観光客はまず行かない。もちろん地球の歩き方にも載っていない。

デリーからの距離は 250 キロぐらいだが、バスは山道をとろとろ進むので、移動は 1 日掛かりである。カルカッタやボンベイからだ、と、3 日ぐらい掛かるに違いない。



マニカランへ

インドのバスは大抵の場合、座席が「2 人~通路~3 人」の 5 人が横に並んでいる。見た目ではめっちゃめっちゃ狭い。しかしインド人のほとんどは痩せているし、インドやパキスタンの様に男の横は男、と決まっている訳ではないので何とかなるみたいだ。

そんな座席だから、クライニングなどは無い。

またトルコのバスと違ってトイレ休憩もあまり無い。

長距離移動というか、北インドの場合には実は短距離長時間移動という方が正しいのだが、そんな訳でバスでの移動はなかなかつらい。

インド人でも下痢をしている人がたまにいて、めっちゃめっちゃつらそうである。

よく見ると、私の隣に座っている人も妙に窮屈そうにしているつらそう。巡礼に向かう私のオーラが彼を通路に押しやっちゃっているのかもしれない。

インドの人たちはあまり乗り物に乗り慣れていないのだろう、簡単に吐いてくれる。みんなベジタリアンだから、臭いはそれほど強くないのだけれど、一人が吐くと簡単に伝染する。

ローカルバスの場合、インドの人たちは途中で乗って途中で降りる。つまり回転が早い。乗っては吐いて降りていく。

吐くために乗ってきたのかと思うような事があったりするから怖い。

でもそんな人たちがランチタイムの休憩では、同じ色のカレーを食べていたりするからそれも怖い。

そんなインドのバスには既に慣れてしまっていて、隣に座って元気に大盛りカレーを食べている自分も結構怖い。

マニカランへ近づくに連れ、道は険しくなり気温も下がる。いよいよヒマラヤ山中に入ったのだ。

山道は車が一台しか通れない事が多い。そこへ大型のバスなんかが通ろうとするので、バックで戻る事もしばしばである。

カーブが多いので、バスは大音響のクラクションを鳴らしながら曲がっていく。

でもここはインド。クラクションを鳴らせば相手がよけるとお互いに思っているから、あわや正面衝突になりそうな事があって怖い。

そんな狭い道だから、ぎりぎりですれ違う時に、やけに時間が掛かる、と思ったら、運ちゃん同士が知りあい、バスの窓越しに世間話で盛り上がっていたりするので怖い。

道は舗装されておらず、小石というにはあまりに大きい石がごろごろしている道を進む。

こんな道ならさすがに4駆だろ、というところをボロボロの大型バスで通る。

インドって何でもありだ。



山の中腹の道。崖をくりぬく形で道路を通しているところもある。道路脇には崩れた石も多く、結構怖い。

マニカランの宿

この日は朝5時半に出発したのに、マニカランに着いたのは夜の7時半。延々14時間。こんなにかかるなんて知らなかった。

以前、モンゴルで温泉に入るために10時間ほど移動した事があったが、一気に新記録樹立。さすがインドの温泉の聖地である。

既に日は落ちているし、とにかく寒いから、とりあえずバススタンドから一番近いホテルに泊まる事にした。見た目は結構ゴージャスな感じ。

私が泊まるのは基本的に安宿が多かった。パキスタンやインドの様な暑い国では、扇風機はあってもほとんどの場合、空調設備なんてものはない。

しかし北パキや北インドの冬は、九州と同じくらいの緯度ながら、標高が高いのでめちゃめちゃ寒いのである。ダラムサラも寒かったから、『インドはどうだった』と人に聞かれたら、『いやー寒かった』などと答えそうである。

これだけ寒いし、見た目ゴージャスなホテルだから、さすがに暖房くらいあるだろうと期待したが、部屋に入って確認すると、暖房は一切無かった。

『インドは暑い国である だから暖房設備は設置しちゃいけない』という法律でもあるかのようである。

でもさすがにこの時期に水シャワーでは辛いので、せめてお湯が出ることは確認した。

これまで私が泊まる様なレベルの宿では、全館給湯システムなんてものは当然ない。大抵の場合、浴室の上の方にタンクが付いていて、電気で沸かしたお湯でシャワーを浴びようになっている。タンクの容量はだいたいどこでも10ガロン。アメリカガロンなのか、インドだからイギリスガロンなのか知らないが、まあ要するに40リットル前後だ。

お湯の温度は 40 度程度に設定されている。大体が省エネタイプ(というかケチケチタイプ)で熱するパワーが足りないのでシャワーを一回浴びると、その後 2 時間ぐらいいはお湯が出ない。だからその 40 リットルが無くなるとだんだんと水になる。40 リットルって量は、体を洗ったらおしまいで暖まるほどではない。

しかしさすがは温泉の聖地。ここの宿ではそのタンク式ではなくて、温泉のお湯がそのまま出てくるのでお湯は使い放題だ。

久々に熱いシャワーを長い時間浴びた。もうのぼせるくらいガッツリ浴びた。そうしないと、部屋が寒いので辛いのだ。部屋の温度は手元の温度計で 9 度。あまりに寒いぞ。

話は変わるが、“打ち水効果”というやつがある。

夏に道路へ打ち水をすると、水が水蒸気になる時に、地面から熱を奪って涼しくなる効果だ。

とすると逆に水蒸気が水になる時は熱が出てくるはず。いわゆる潜熱ってやつだ。

部屋があまりに寒いのでこのままじゃあとても寝られそうにもない。与えられている毛布は薄手のやつが 2 枚(3 枚目からは毛布代を取るというせこい主人なのだった)。

そこでシャワーのコックを全開にして、シャワー室のドアも全開にしてみる。するとアッという間に部屋まで蒸気があふれてきた。乾燥している国では喉を傷めない様にいつもこの方法で部屋の湿度を上げていたのだが、果たして温まるのかどうか。

しばらくそのままにしていると部屋中が霧状態になり、もう既に視界 5 メートル。まるで浴室である。しかしあれだけ寒かった部屋が少しずつこの潜熱で暖まってきた。

当然の事ながら、冷たい壁には水滴が垂れ始めている。床は水をこぼしたように濡れている。ホテル備え付けのコップなんかにもびっしり水滴が付いている。水が溜まって飲めそうだ。

蒸気はシャワー室から次々に供給され、部屋中がとても冷たかったのでどんどん水滴となり、そして徐々に潜熱で部屋が暖まってきた。潜熱作戦大成功だ。

潜熱、それはハイヒートバリューとローヒートバリューの差、英語で言うと Latent Heat である。ふっふっふっ。さすが放浪する科学者と言える。

そんな状態だとコンピューターまで濡れてしまわないのかと指摘されそうだが、ちっちちっ。

さっきまでバスのエンジンの上に荷物を乗せていたのでコンピューターは温かく、水滴は付着しないのだ。

さすが放浪する知恵者。英語で言うと Resourceful Person である。

さて、部屋も暖まった事だし、さてそろそろ寝るか、と畳んであった毛布をベッドに広げようとして気が付いた。シーツも毛布も表面には無数の水滴が付いている。っっ、っっ、冷たい。びしょびしょだ。

寝られそうもない……………。

さすが放浪する知恵者。和製英語で言うと Monkey Resourceful Person である。

翌朝、寒くて目が覚めた。温度計は 5 度をさしていた。鼻の頭が冷たくてツンとする。

昨日の潜熱作戦で、部屋中どこも濡れていた。床も全面びしょびしょだ。もう少し寒かったら、

部屋の中でアイススケートが出来たかもしれない。

明るくなって気がついたのだが、マニカランの村はヒマラヤの奥深い谷にあって、川の両側はいきなり切りだった崖である。

その為この時期、村に太陽が当たるのは 11 時頃から 3 時頃までらしい。

そしてこの宿は、北側斜面に建っているのも、一日中太陽が当たらないという場所にある事が分かった。

昨夜、最低一週間は泊まるからと値切り交渉していたのだが、『この宿、寒いから移動するよ、やけに湿っぽいね』と宿の人に後半を強調して移動することに。



谷間にある大きな岩に通した橋。その近くではバスがそろそろと走っている。

小さな村だが宿はたくさんあるようだ。

今度は太陽さんさんさん。といっても 1 日に 4 時間ぐらいだけど、村で一番日当たりのいい宿にした。洗濯物が乾くので助かる。

それでも夜は寒い。しかも今度の宿は、共同の湯船(温泉!)はあるが、それぞれの部屋にはシャワーが無い。昨日の様な潜熱作戦は出来ない。

そこで今度は、熱湯を部屋で作り出す作戦に変更。

バケツに水を張りウォーターヒーターを投げ込む。ウォーターヒーターとは、電気でお湯を沸かす器具で、普通はコップに入れて使う。今は世界中どこでもペットボトルの飲料水が容易に手に入るので問題はないが、15 年前の旅行者は、大抵これで水道水を煮沸消毒して水やコーヒーを飲んでいったもんだ。

私が持っていたのは先日買ったパキスタン製の強力なやつ。インドは 220 ボルトなので、コップの水なんかは 20 秒も掛からずに沸騰する。沸騰すると、その勢いでコップの水が半分以上噴き出るといふ優れものである。さすがパキスタン製。

でもバケツに汲まれた水でも完全に沸騰するのが嬉しい。

電気コードがやけに短いので洗面台にバケツを置いておいたら、100 度のお湯で、バケツが洗面台の形に見事に変形して最後には割れた。発見、インドのバケツはヤワである。

そこで今度はステンレスの水差しに変更。沸騰すると吹き出してしまい、やはり水が直ぐに無くなってしまうので、水差しにペットボトルを突っ込んで飲料水も熱する事にした。湯たんぼ作戦である。

沸騰したポットからペットボトルを取り出して、毛布の下に入れる。これはなかなかいける。何本も作ってセットした。

食事に行き帰ってくると、予想通り毛布の上からでもホカホカに暖かくなっていて、毛布の中などは.....濡れている???

ペットボトルの口の 1 つが熱で変形していて、少しずつ漏れていたみたいだ。

寝られそうもない・・・・・・・・。発見、インドのペットボトルはヤワである。

話は変わるが、寒い地域を旅していると、洗濯物を干してもなかなか乾かない事がある。そんなときには、このようにペットボトルの水を沸騰近くまで熱しておいて、洗濯物を巻きつけると直ぐに乾く。旅の知恵である。

濡れたシャツも同じようにして乾かそうと、口の部分を熱しすぎない様に再びペットボトルを熱していると、今度はショートして部屋が真っ暗になった。ふと外を見ると村全体も暗くなっている。発見、インドの電気はヤワである。

何だか今夜は暗くてよく寝られそうだ。

因みにパキスタンのウォーターヒーターもヤワである もう壊れやがった。

温泉の聖地マニカラン

マニカランの村では、インド料理の他、チベット料理、ネパール料理が食べられる。そして、それぞれが結構美味しい。

その内の一軒で朝食を取っていると、この店の少年がポリタンクを持ってどこかへ水を汲みに、行ったり来たりしている。

いやそれは水ではなくてお湯だった。どうやらチャイも料理も、ここの温泉水で作られているようだ。

少年について行ってみると川のそばから温泉が湧き出していた。

『ここに触ってみな』と、切りだった川沿いの

大岩に手のひらを当てる少年。触ってみると岩全体がかなり熱かった。

どうやら源泉はすぐ近くにあって、かなりの熱量を持っているようだ。

そのすぐそばではオバチャンが洗濯をしている。

インドの洗濯は棒を持ってバシバシ叩く方式。彼女は午後もその場所で洗濯をしていたのでランドリーオバチャンなのかもしれない。こんな寒い地域だと、温泉はありがたいだろうな。

『人が入れる温泉はどこにあるの?』と聞くと、『村中どこでもさ』という答えが返ってきた。

さすが聖地、この村には至る所に旅行者が入れる大浴場があるらしい。すべて無料だという。そして何と24時間オープン(というか、誰も管理している人がいない)。

小さな村を一周してみると、あったあった何ヶ所も。

ヒンドゥー教の寺院の中、シーク教の寺院の中、村の中心、川沿い・・・・。露天あり、屋内あり。どうやらこのマニカランは一大温泉保養所になっているらしい。

早速、シーク教の寺院にある温泉に入ってみることに。



川沿いから湧き出る温泉のお湯で洗濯をするおばさん。すずぎは川の水だ。

インドの温泉も海パン着用である。でも男女別々。

ここは男性が露天、女性は屋内だ。泉質は無色透明無臭。深さ 1.2 メートル。立って入れれば 100 人は入れそう。

浴槽の底には、緑の藻がびっしり育っている。つるつると滑って歩くにくいほど。どうやら掛け流しをいい事に掃除は一切しないみたいだ。栄養満点の温泉水、と前向きに捕らえよう。流れるお湯の量はじゃんじゃん注がれているが、お湯の表面に油が浮いているのが不思議だ。きらきら光って素敵、と前向きに捕らえよう。

設置されてあるスピーカーからはシーク教のお経が延々と流れていてちょっと騒々しい。さすが聖地、と前向きに捕らえよう。

そんな場所だが、目の前にはきりだった山があり、杉林の緑が実に映えていて綺麗。視線を下げれば川が流れている。

体を石鹸で洗い終わった若者 5 人を何気に見ていたら、体を拭いた後、油の様な物を全身に塗っている。そして塗り終わると何故か湯船にザブン。どうりで油が浮いている訳だ。

どうもインド人は体に油を塗る習慣がある様子。しかし油を塗った後で入らないで欲しいよなあ。

シーク教寺院

このシーク教の建物にも入ってみる。

アムリトサルゴールデン temple とは比較にならないが、割と大きな寺院である。この地で温泉が湧き出し、何か霊的なものを感じて思わず建立したのかもしれない。

内部には屋内の温泉もあった。宿泊施設もあるようだ。

村の人に聞くと、マニカランに住むシーク教徒の割合は 10%程度らしい。しかしこの場所も、シーク教徒には聖地なんだそうだ。毎日多くの人が、バスで訪れるという。確かにターバンを巻いた人が多い。

本殿に行く途中、靴を預ける場所がある。髪を隠す布も貸してくれる。そしてその奥にはゴールデン temple と同じように、巡礼の信者が飯を食う場所があった。

またしても“無料”のカレーである。どうやらここにも宿泊施設があるようだ。

シーク教徒って素敵。

本殿ではお経を読んでいる。



シーク教の寺院にある大きな露天風呂の温泉。100 人は入れそう。ここから眺める景色は最高。



シーク教のお経を唱えているところ。神聖な場所だから撮影不可かと思ったら、是非撮ってくれと言われた。

先ほど温泉につかりながら聞いていたのはテープなんかではなくて、生お経だった訳だ。

写真を撮ってもいいかと聞くと、あごを斜めにしゃくりあげる。そりゃそうだよな。さすがに神聖中の神聖な場所だもんな。

しかしカメラをしまうと、『何で撮らない』という。

実はそのジェスチャーは、『いいよ』という意味なのだった。

パキスタン・インドの生活が長いものの、何だかまだあのジェスチャーに慣れていない。

でも彼らは彼らで、カメラには慣れていないらしく、やけに緊張した顔つきだった。

村の共同浴場

村の中心に、ゴボゴボと湧き出している源泉がある。源泉は触れないくらい熱い。

その先にはちょっとした屋根のついた小屋。30人は入れそうな大きな湯船である。

お湯の温度も丁度いい。計ってみると43度である。

しかしその横ではお母さん達が熱心に洗濯をしているのだった。時々、バケツでその浴槽から直接お湯を汲んでいる。

さすがにこの雰囲気では、全裸は無理だ。



村の共同浴場。もちろん温泉。ここでもオバチャンが洗濯のお湯を汲みにくる。

ここのお湯は、無臭ながら、少し濁りぎみ。

注がれるお湯の量もたっぷりで、上の方から次々にあふれているのでインドの温泉特有？らしい油もほとんど浮いていない。藻もまったくなくて気持ちが良いそう。

夜まで待って、全裸で入ってみる。空には星が輝いていて、冷たい空気が気持ちいい。

日本で長期間に亘り湯治をすると、たいへんな金が掛かると聞いた事がある。アトピー持ちの友人の話だ。

このマニカランではめっちゃめっちゃ安くつく。

日だまりのバルコニーで本を読み、時々温泉に入ってビールを飲む。気が向いたら雄大なヒマラヤを見ながら付近を散策し、チャイを飲む。

カレーに飽きたらチベットの餃子やネパールのヤキソバを食べる。

インド人向けの保養地だから物売りも全くしつこくなく、ぼられる事も無い。治安もすこぶるいい。

こんな場所なら半年ぐらい暮らせそうだ。

アトピーに効く温泉かどうか分からないけど、もし効くなら友人に勧めたい。

つづく